

母子健康手帳の活用に関する研究

愛媛県保健環境部 小川 一雄, 橋本 照, 浜本 真澄,
松木 悠紀雄
愛媛県伊予保健所 木村 真理

1 はじめに

母子健康手帳は、健康管理情報の記録としての役割のほか、保護者の健康管理行動の指針としても大きな役割をもつ。この活用状況を把握し、さらに活用状況を高めるための方策を3年間にわたって検討した。

これまでの2年間の調査検討の中で、次のことが明らかとなった。3歳児保護者の同手帳の活用は、健診や予防接種の記録としてのそれであり、育児記録、病歴記録としては少ない。また手帳の記入状況には個人差が大きく、常時携行し、受療の際持参し、健康に関心の高い保護者に記入率が高い。一般的には第1子で記入率が高く、妊娠中・乳児期・幼児期の順に記入が少なくなり、歯科健診や晩期新生児期の記録については記入が少ない。手帳の改善に対する要望は、3歳児保護者は親しみのもてる手帳形式・内容への指向であり、母子保健従事者は発育・発達基準や予防接種時期の一覧などを含む健康教育欄の充実と、健診記録や保護者記入欄の改善などの要望が多い。今年度は、これらを補足するために、手帳の健康教育欄充実の代替策としての副読本『赤ちゃん』の活用と、手帳の活用状況を確認するための調査を、乳児保護者を対象に実施し、その結果をふまえた上で全般的検討を加えることとした。

2 調査対象及び方法

調査対象は、前述の観点から乳児健診受診児の母親を対象とすることとし、具体的には昭和61年1月に乳児健診を実施した5保健所（松山中央、今治中央、宇和島中央、伊予、大洲）管内での生後6か月までの児をもつ母親である。

調査方法は、健診受診時に、乳児保護者の手帳と副読本の活用、及び育児上の不安や情報の入手などを内容としたアンケートによる調査である。

3 調査結果及び考察

(1) 母子健康手帳の活用状況

合計691人の調査結果によれば、乳児期における母子健康手帳の活用は、3歳児保護者の活用とやや異なり、育児記録、健診記録、予防接種記録としての活用が多く、半数の母親は病歴記録としても用いるなど、一般に利用状況は高い。また出生順位によっても活用に差があり、母親の体重変化の記録や乳幼児身体発育曲線の記入は第1子の場合に多く、予防接種記録としての活用は第2子以後で高い。

また、回答を松山中央保健所管内での第1子の保護者に限って、今回の結果と59年度の3歳児に関する調査結果とを比較すると、3歳児保護者では、乳児の場合に比べ育児記録、病歴記録としての利用は半減し、予防接種記録としての利用は約20%増加する。

(2) 副読本『赤ちゃん』の活用状況

大多数の母親は副読本を読んでおり、手帳の読まれかたと差異はないが、内容を確実に把握しているとは言えない状況にある。「役に立つ」との回答は77%あるが、10%は「役に立たない」と回答し、その理由として、「簡単すぎる」、「生活に合わない」、「広告が多すぎる」などを挙げている。また「内容を詳しく」との要望が一部にあり、目的・使用方法などが母親に周知され、大切なものと考えられている手帳とは異なり、副読本は育児書のひとつとして考えられていることが示唆される。

(3) 育児についての母親の不安と行動

乳児期の保護者の不安は、栄養、発育、発達、皮膚の状態に関することが多く、不安解消のために家族や友人、医師の助言、育児書などが参考とされ、副読本も30%の保護者に参考とされているが、市販の育児書との併用がほとんどである。

育児書を参考とすることが多い幼児の場合とはやや状況が異なる。

また、不安は当然のことながら第1子で全般に多い。

さらに第1子について、遊びかたに不安をもつ14%の母親とその他の母親を比べたところ、不安をもつ母親はその他の不安も多く、中でも栄養と発達に関して差が認められたほか、母乳育児や児への話しかけの割合も少なかった。

これらのことから、これまで以上の母と子のかかわりを考えた育児指導の手だてを、手帳や副読本の改善を考える中で検討する必要がある。

4 まとめ

母子健康手帳の活用状況は、児の年齢によって差があり、乳児期では幼児期に比べて積極的に活用されていた。乳児期には母親の育児への関心が高く、児の成長も著しいことから、手帳の内容も幼児期より詳しいものが望まれる。

副読本は、手軽な育児書として活用されてはいたが、母親は母子健康手帳ほど重要視していない。現在の状況では、副読本を母子健康手帳の健康教育欄充実の代替として使用できるとは言いきれないが、その位置付けや内容を再検討することにより、また母子保健事業現場での保健指導の方法によって、ある程度可能になるのではないかと考えられる。

われわれは母子健康手帳の活用状況、副読本との関わりを検討した結果、今後次のような改善が望ましいとの結論をえた。

(1) 母子健康手帳について

- ① 健康管理記録としてのみの形式でなく、健康管理行動を啓発するための手段としても用いる形式とする。
- ② 妊娠、出産、児の成長の記録として簡潔にまとめ、母親への教育的な項目は副読本を利用する。
- ③ 健診の記録は、大阪府小児科医会の報告に見られるように、その月齢でのチェック・ポイントを明示し、保健と医療の共通情報として使えるようにする。歯科の記録も同一頁に入れる。
- ④ 保護者の記録は、病歴・発達・発育に分け、それぞれを一覧表にまとめて見やすくする。乳幼児身体発育曲線はもっと詳しくし、記入しやすくする。

⑤ 児の年齢に応じて内容を充実したり、児の行動についての記載を入れる。また、予防接種の時期を示したり、発達、発育についてある程度の基準を示すなどの工夫をする。

⑥ 色刷り、さし絵の挿入など、育児記録として母子のつながりを一層深めよう形式を改善する。

⑦ 手帳の内容はすべてを規定せず、最低限必要な内容を規定することとし、地域の実態に応じてさらに制度等の内容を付加できるよう考慮する。

(2) 副読本について

① 母子健康手帳のマニュアルとして位置付け、母子健康手帳の使用方法や目的、関連項目の指導内容などを示し、有効に活用を図る。

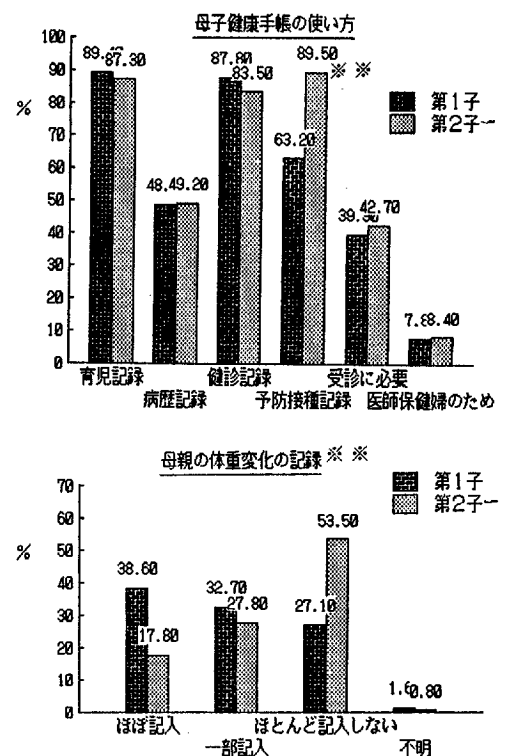
② 最低限必要な基礎知識を含む育児書としても使用できるように、内容を充実する。

以下、有意差を示す。

※ p < 0.05

※※ p < 0.01

図1. 母子健康手帳の活用状況



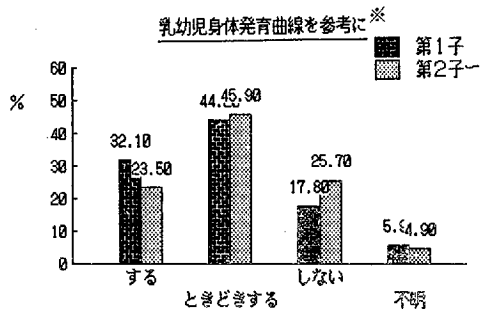
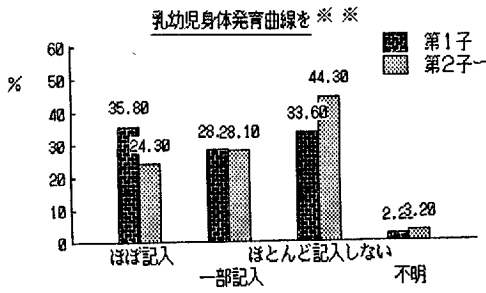


図2. 副読本「赤ちゃん」の利用状況

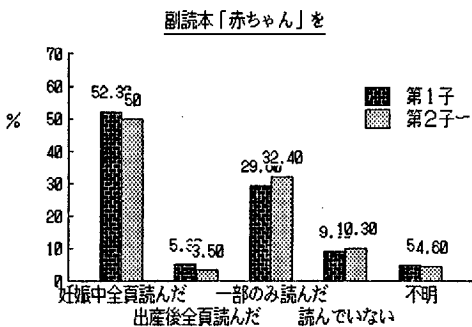
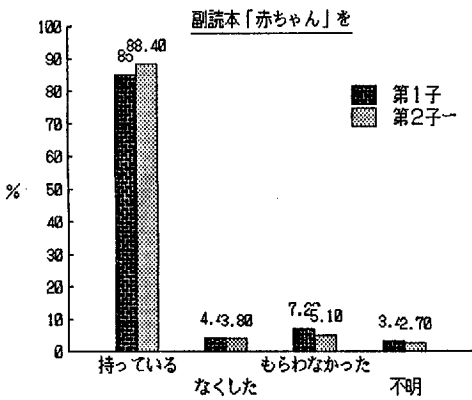
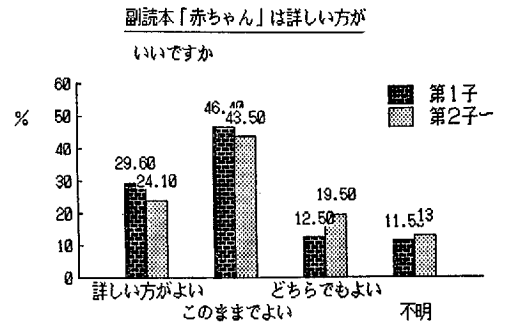
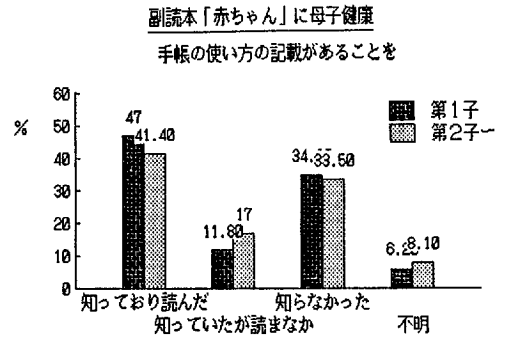
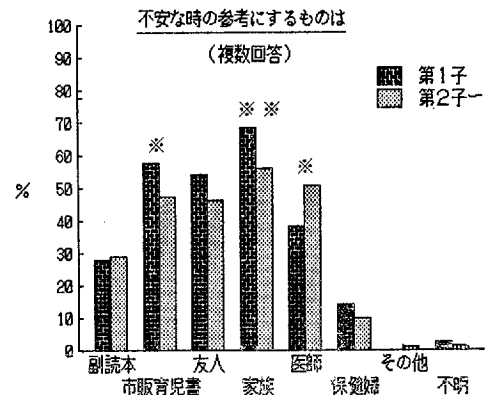
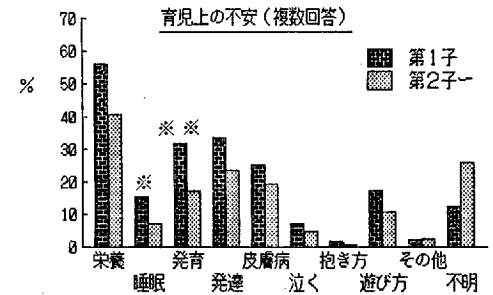


図3. 育児についての母親の不安と行動



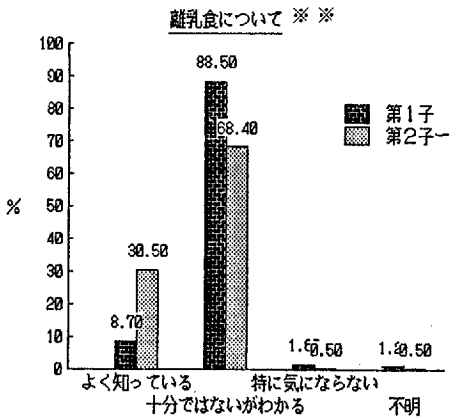
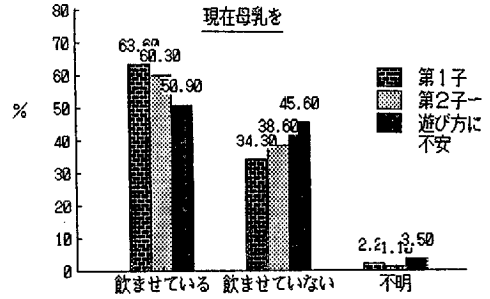
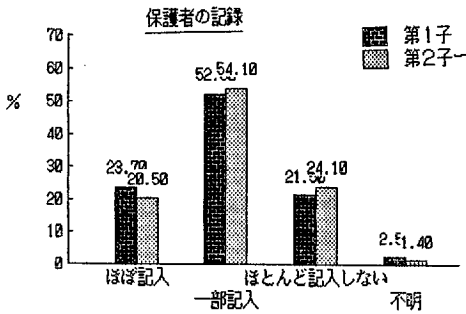
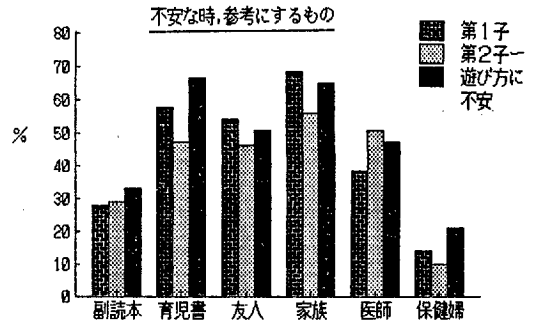
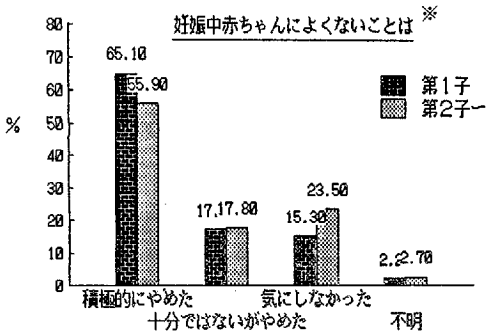


図5. 児の年齢による母子健康手帳の活用状況

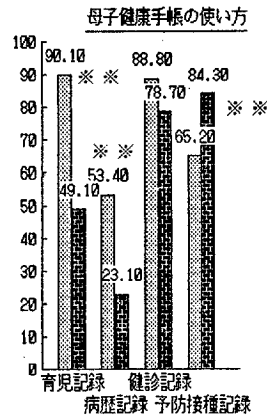
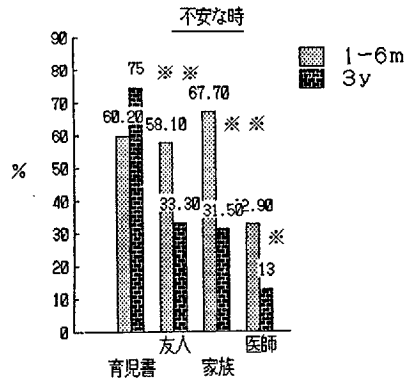
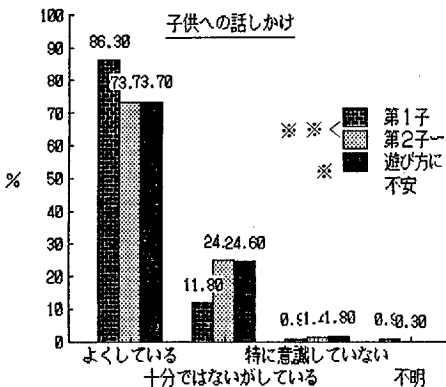


図4. 遊び方に不安をもつ母親の行動





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1 はじめに

母子健康手帳は、健康管理情報の記録としての役割のほか、保護者の健康管理行動の指針としても大きな役割をもつ。この活用状況を把握し、さらに活用状況を高めるための方策を3年間にわたって検討した。

これまでの2年間の調査検討の中で、次のことが明らかとなった。3歳児保護者の同手複の活用は、健診や予防接種の記録としてのそれであり、育児記録、病歴記録としては少ない。また手帳の記入状況には個人差が大きく、常時携行し、受療の際持参し、健康に関心の高い保護者に記入率が高い。一般的には第1子で記入率が高く、妊娠中・乳児期・幼児期の順に記入が少なくなり、歯科健診や晩期新生児期の記録については記入が少ない。手帳の改善に対する要望は、3歳児保護者は親しみのもてる手帳形式・内容への指向であり、母子保健従事者は発育・発達の基準や予防接種時期の一覧などを含む健康教育欄の充実と、健診記録や保護者記入欄の改善などの要望が多い。今年度は、これらを補足するために、手帳の健康教育欄充実の代替策としての副読本『赤ちゃん』の活用と、手帳の活用状況を確認するための調査を、乳児保護者を対象に実施し、その結果をふまえた上で全般的検討を加えることとした。